第４章

ソマリアにおけるシアド・バーレ体制の再検討

――その統治と遺制をめぐって――

遠 藤　貢

はじめに

1991年にモハメド・シアド・バーレ（Mohamed Siyaad Barre）体制が倒れてから国内を実効支配できる中央政府がソマリアには存在していない。そのため，ソマリアは，1990年代以降の研究史において典型的な「崩壊国家」（collapsed state）として認識されてきた。本章執筆段階（2007年１月上旬）において，ソマリア情勢は新たな局面を迎えている。2006年６月には「崩壊国家」ソマリアの首都モガディシュ（Mogadishu）を中心に勢力を拡大してきたイスラーム原理主義勢力の連合体であるイスラーム法廷連合（Union of Islamic Courts: UIC）がモガディシュをほぼ掌握した。このUICが南部への勢力を拡大するなか，バイドア（Baidoa）に拠点を置いていた暫定連邦政府（Transitional Federal Government: TFG）(1) との間の武力衝突が激化し，TFGを支援する隣国エチオピアが自衛を目的に宣戦布告を行って武力介入を行っている。エチオピア軍はUIC拠点に空爆を行ったほか，TFGを支援して首都モガディシュを制圧し，南部を軍事的に掌握する局面を迎えている。さらにイスラーム原理主義勢力を狙ったアメリカによる空爆も行われるに至っている。したがって，今後のソマリア情勢は依然として不透明であり，予断を許さない状況が継続することが予想される。

本章の背景には，現在上記のような問題に直面している「崩壊国家」(2) としてのソマリアはなぜ生まれたのか，という問題意識がある。そして，この生成とシアド・バーレ体制がどのように関わったのかについて試論的に検討を加えることが課題である。ただし，この問題を検討する際に区別して考えなければならないことがある。第１に，なぜソマリアは「崩壊国家」と考えられる状況に至ったのかという比較的短期的な「出来事」（event）を生み出したこととの関連である。これは「崩壊国家」の生成の問題と言い換えてもよい。そして，第２に「崩壊国家」という状況がなぜ15年以上にもわたり継続的に存在しているのかという比較的中期の持続的な「過程」（process）としての問題である。これは，「崩壊国家」の持続・継続の問題と言い換えることができる。実は中央政府が存在していないという「崩壊国家」という状況下において，ソマリア南部以外の地域では自生的な秩序形成の試みが存在していることを無視することはできない。これは北西部で政治独立を志向しているソマリランド（Somaliland）や，ソマリア北東部で連邦制を希求するプントランド（Puntland）といった「事実上の国家」（de facto states）(3)，あるいは「国家の中の国家」（states-within-state）(4) の形成に端的に示されている問題である。こうした基本問題の先には，より長期的にみて「崩壊国家」はどのようにアフリカの歴史過程のなかで意味づけられるべきなのかという問題がある。これは「崩壊国家」を修復すべき惨劇というネガティヴな状況ととらえるのか，発想を転換してアフリカにおける新たな社会秩序や国家の形成というより長期の過程の一部として改めて評価するようなポジティヴな視座を持ち込むのかという問題設定とも関わるものである。無論，本章における基本問題設定の先にある問題について，何らかの明確な解答を出すことまでは必ずしもその射程にはおいていない。

本章の作業は，「崩壊国家」状況に生じてきた様々な事態やそれらに対して示されてきた評価を改めて整理しつつ，「崩壊国家」に先行して存在していたシアド・バーレ体制を再検討することにある。そこから，1969年から2001年までの22年間の「個人支配」の様式（なお，ここで着目するのは，シアド・バー

レ個人では必ずしもない）がソマリアの歴史のなかで持つ意味を可能な範囲で明らかにすることをねらいとするものである。以下第１節では，本章に関わる先行研究を整理しながらその視座を提起する。第２節では，シアド・バーレ体制をその変容過程を注視しながら概観する。そして第３節では，改めて「崩壊国家」状況のソマリアとシアド･バーレ体制の連関について議論を行い，本章における評価を提起する。

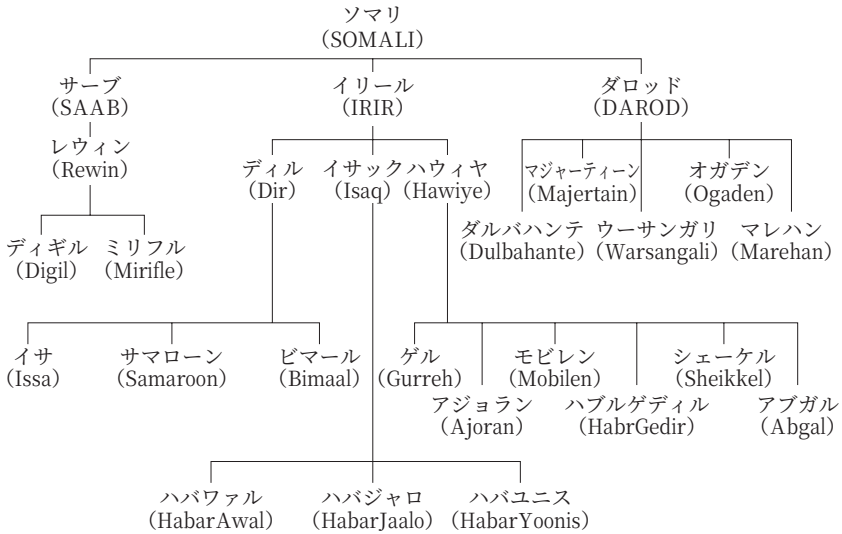
第１節　先行研究

１．ソマリア研究の概要

20世紀後半におけるソマリア研究はイギリスの碩学ルイスが中心となって展開してきたことは広く知られており，その一連の研究はソマリア研究の基礎文献として位置づけられてきた（Lewis［1961，2002］）(5)。そこでは，基本的に複数の氏族によって構成される社会(6) としてソマリ民族が描かれるように，近年の多くの研究や著作においても，その政治力学を読み解く際に氏族間関係を軸に組み立てている場合が多く，これがソマリア研究の通説的な視座と考えられる。ただし，ソマリアの氏族社会については統一された見解が必ずしもあるわけではない。本章では以下のような氏族に関わる説明に基づいて議論を進める。ソマリアの氏族は父系制を基礎とした血縁集団であり，農耕系のレウィン，遊牧系のイサック，ダロッド，ディル，ハウィヤが５大氏族である。本章で出てくるオガデン，マレハン，マジャーティーンなどは支族（sub-clans），さらにその下位集団としてのディヤ（diya）という数百から数千の構成員からなる集団がある。図１におおまかなソマリアの氏族系図を示しているが，支族以下の血縁集団としてはここに示されていない集団が存在する（行政区割については図２参照）。

しかし，こうした従来の氏族関係を中心に据えてその対立と協調を軸にソ

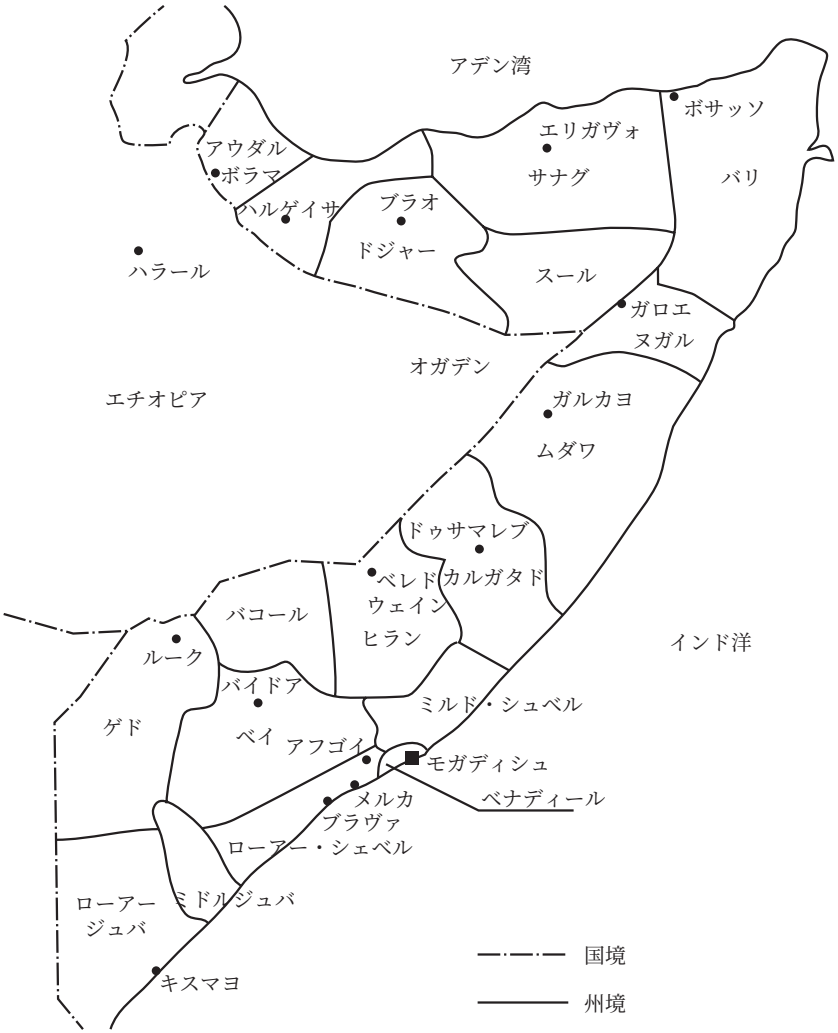
図１　ソマリ民族の氏族系図



（出所）Lyons and Samatar[1995:9], Brons[2001:18-29]を修正して筆者作成。

マリアの政治を描く「伝統主義」的な解釈に対して，農業が営まれているソマリア南部を中心的な事例として，経済関係を軸にした都市部の「社会階層」をソマリ社会・政治分析に取り入れる試みが近年行われている。その意味ではソマリ社会の根幹を規定してきた「氏族」という絶対的と考えられてきた社会関係を中心に据える解釈を相対化するための「新風を吹き込む」試みが始められている段階にあるといってよい（Ahmed ed.［1995］，Besteman［1999］，Besteman and Cassanelli［2003］）。それは，ソマリ民族一体性の「神話」を明らかにする研究という性格も有している。ソマリアの社会経済に関しても，その遊牧民の生活や氏族形成に関してはルイスの著作をはじめとして様々な研究があるが，ミクロなレベルでの社会関係の変容等についての著作はそれほど多く著わされていない。ベストマンらの研究はそうした意味で貴重なものといえるし，アブディ・イスマル・サマター（Samatar［1989］），アーメド・ユスフ・ファラー（Farah［1994］），さらに近年のリトル（Little［2003］）によ

図２　ソマリア－1975年以前の行政区割－



（出所）Brons［2001：16］。

る著作がそれぞれソマリアにおける社会変容と政治の関係を読み直すうえでは重要な研究である。

また，ソマリアの主に南部を植民地としていたイタリアでは1961年の文部省の決定により植民地研究は大学のシラバスから除外されたため，イタリアでの植民地研究はごく限られた研究者によってしかなされてこなかったという事情がある (Tripodi [1999])。これはソマリアに関しても妥当する。しかし，1989年にシチリアで開催されたイタリアの植民地政策に関する学会を期にイタリアの植民地政策研究の必要性が認識されたことから，この分野での研究もその後始まっている(7)。また，アーメド・カシム・アリが指摘するように，本章で主に扱う1969年以降の政治体制下での政策のもとで多くのソマリア人知識人は国外に脱出することを余儀なくされ，ソマリア人の手によるソマリア国内での研究が困難に直面し，北米に居を移したディアスポラによる研究が中心とならざるをえない状況が生まれてきた（Ali［1995］)。

2．「崩壊国家」としてのソマリアとシアド･バーレ体制の関係に関する解釈論

先に問題にしたように1990年代のソマリアが「崩壊国家」と認識される状況に至り，近年ではその状況とそれに対する対応についての研究が中心的に行われるようになっている。特にアメリカを中心とした国連多国籍軍(8) による平和執行の失敗以降，「介入」「干渉」をめぐる多くの論考・研究が著わされてきた（たとえば，Drysdale［1994］，Zartman［1995］，Clarke and Herbst［1997］)。そこには，近年のテロリズムとの連関のなかで「崩壊国家」を検討するものも含まれている（Menkhaus［2004］)。

シアド・バーレ体制と「崩壊国家」の関連は一般的には政治，経済，国際文脈との兼ね合いで議論されてきた。たとえば，日本のNGOによるソマリアでの難民支援プロジェクトを通じた長い活動経験を持つ柴田は，ソマリアが「崩壊国家」に至った原因として以下の５点を挙げた。第１にシアド･バーレ政権の激変する国際社会への対応能力の欠如（ここには，政治，経済，社会という広い側面が含まれる)，第２に政権への不満，特に北部でのソマリア国民

運動（Somali National Movement: SNM）との戦闘とそれに伴う家畜輸出を通じた収入減，第３に生活必需品の高騰と不足，中央銀行の支払い停止（1989年段階），第４に近代国家建設のもとでの農村の権力構造の変化（軍人と商人の台頭と「伝統的」指導者の相対的な没落）と中央での特定氏族登用，第５に「崩壊国家」をもたらした「内戦」の構図が単なる氏族対立ではなく，政治権力をめぐる対立であったこと，である（柴田［2000:18-19］）。上記の論点は読み替えると以下のように整理できよう。第１に国際的な要因である。冷戦構造のもとでのクライアント国家という特性による不安定性と，「アフリカの角」地域における民族分布と領土問題とも連動する「難民」発生による伴う国内の不安定化である。第２に国内の政治状況である。オガデン戦争後のシアド・バーレ体制の正統性への疑問と連動する国内外の反政府勢力の台頭と，1980年代末の内戦状況である。第３に経済状況である。1980年代末の内戦の結果，北部の家畜輸出の停止により外貨収入が得られなくなったほか，金融機関も機能不全に陥り，経済が深刻な危機に瀕したのである。第４にシアド・バーレ体制下での社会変容である。地方（特に南部）における権力構造の変質（伝統的指導者の没落と商人，シアド・バーレに連なる軍人を中心とした新興勢力の台頭）と，対立の性格変化（紛争の政治化といってもよいかもしれない）である。基本的には，シアド・バーレ体制の内外政策の帰結としてソマリアの「崩壊国家」化がもたらされたという見方であり，包括的な整理ではあるが，それゆえに羅列的である感は否めない。しかも，これは短期の「出来事」としての側面への一定の説明とはなりえても，「過程」を説明する際にどのように関係しているのかについては，曖昧さを残している。

また，「崩壊国家」のもとでのソマリア内戦を一事例としながら，クラウゼヴィッツ流の「政治の延長形態としての戦争」に関する研究を行ったドゥイベステインの研究では，国連が完全に撤退した1995年までの状況について，言い換えれば，「崩壊国家」が持続していることに関して，以下の指摘がなされている（Duyvesteyn［2005］）。権力の獲得への欲求が支配的な紛争状況であり，そのために多くの立場を異にする勢力が台頭し，そこでは氏族アイデン

ティティへの訴えが減少したほか，勝敗を決定付ける武力の調達ができないほか，指揮権や支配権において問題を抱えている。そのため，どの勢力も「崩壊」以前に存在していた国家権力を確保するという利益実現ができない事態に陥っているということである（Duyvesteyn［2005: 109］）。ここにはソマリアという個別の文脈を離れ，「崩壊国家」という状況が，次なる政府の樹立を困難にする傾向について説明されていると考えることができる。こうしたとらえ方は，確かに興味深い論点を提起してはいるが，氏族アイデンティティの扱いについては疑問が残るほか，この研究が対象としていない1995年以降さらに10年以上にわたり中央政府が存在していない状態，さらにソマリランドやプントランドの形成などを説明できるものではない。

実は「崩壊国家」という状況が存在してしまっていることは，それ自体国際政治学上の興味深い問題ではある。ただし，本章での関心はこうした国際社会の対応の問題というよりも，なぜ「崩壊国家」と認識される状況にソマリアが陥り，しかもその状況が継続しているのかという問題である。その意味では，ソマリアに関する近年の研究史のなかで「崩壊国家」の問題をソマリアの歴史，国家形成，国際政治，安全保障の観点から最も説得的に議論しているもののひとつがブロンスの研究であろう（Brons［2001］）。ブロンスの基本的な立場は，国家をブザン（Barry Buzan）のよく知られた議論を援用しながら，第１に「アイディアとしての国家」，第２に領土と領民という国家の物理的な基礎，第３に国家の制度面の３つの側面から評価しようとするものである。特に「アイディアとしての国家」は，国家形成の基礎となる政治的アイデンティティ，あるいはその組織上のイデオロギーを問題化しようとするものであり，本章での着眼点に近い問題領域と考えられる。ブロンスによれば，ソマリアに関してみるとこの側面を構成するのはソマリ民族の統合を志向する「大ソマリ主義」，シアド・バーレ体制のもとで提起される「科学的社会主義」，遊牧民族としての一体性，の３点である（Brons［2001: 30-31］）。ブロンスの「崩壊国家」ソマリアの評価は，国家イデオロギーが消失し，国家の諸制度（言い換えれば政府）が解体し，国境は維持されているものの国内

的な凝集力を失っている状況ということになる（Brons［2001: 283］）。そして従来のソマリアという国家はソマリ民族にとり永続的に定着しうるものとなってはこなかったとして，今後の中央政府の樹立についても疑念を示す結論を導いている。そして，この議論を展開する際に先に挙げたソマリア研究の新潮流の議論にも目を配り，また批判的安全保障研究の視座(9)を取り入れながら，「崩壊国家」のもとでのソマリランド等にみられる「下からの」国家形成について積極的な評価を行う方向性を示している。

なぜ「崩壊国家」と認識される状況になぜソマリアが陥り，しかもその状況が継続しているのかという問題をシアド・バーレ体制との関連において考える際のひとつの興味深い指摘が1990年代半ばに北米のソマリ研究学会（Somali Studies Association of North America）の会長であった比較文学者のアリ・ジマール・アーメド（Ali Jimale Ahmed）によってなされている。その立場はソマリア研究の新思潮に属するものである，ここで紹介する議論は，かなり抽象的であるものの，シアド・バーレ体制こそが政治化した氏族対立というソマリア社会の構造を歴史的には「最終的に」創り上げ，それが1990年代の「崩壊国家」の状況下で再生産されているという議論として理解できる。このことをアリ・ジマール・アーメドは次のように述べている。

> 「シアド・バーレが権力の座についたことが悲劇であるとすれば，その崩壊後におきてきたことは茶番であった。この点にはしっかりと注目しておく必要があるし，シアド・バーレはこの悲惨な状況の脚注（footnote）にはなっていない。内戦はシアド・バーレの数々の行動のなかにすでに予兆を有していた。このことはシアド・バーレをソマリ文化の真正な体現者として読み解く必要性を示している。（中略）シアド・バーレに公平であるとすれば，彼は50年以上にわたってもつれてきた（ソマリアにおける）困難なパズルの最後の一片であった。（改行）そして，その呪い（curse）はいまだに我々とともにある。そしてソマリアの知識人が勇気を持って，もはや『部族的な』（“ tribal ”）政府や政治体制を営むことが不可能である

ことを人々に告げることが必要である。こうした方向性（引用者注:『氏族主義的な』政府の樹立）を指向したすべての試みは無に帰している（中略）その代わりに我々は新たな倫理（ethic）[10]を構築しなければならない」（Ahmed ed.［1995: 151］）。

「崩壊国家」という異型の状況はシアド・バーレ体制のなかにすでに予想されていたということでもあるし，その意味でシアド・バーレが「崩壊国家」の脚注になってはいないとのアリ・ジマール・アーメドの指摘は，時間的に持続しうる「過程」としての「崩壊国家」をシアド・バーレ体制との連関で考える必要性を指摘する議論と符合するものになっている。ただし，この文章のなかにおける「シアド・バーレ＝『ソマリ文化の真正な体現者』」という評価がどの程度妥当なものであるのかについては改めて検討しなくてはならない問題と考えられる。ここでの「ソマリ文化」は，ソマリ社会に根ざした「伝統的な」意味世界の体系というよりも，「近代的な」ソマリ社会構築のなかで生成されてきた「創られた」体系という意味合いを強く持っているものと解釈できる性格のものであり，「伝統主義」的な解釈とは対置される。アーメド自身それが意図的に創られた混成（hybrid）の，また世界的な広がりを持つ（cosmopolitan）性格のものという理解を示していることからも，実はここで示されているのは，ソマリ民族の一体性を志向する方向に逆行する氏族間の対立・断絶を生み出す意味体系としての「ソマリ文化」を実現した者としてのシアド・バーレという見方の可能性がある。

こうした解釈に対し，「ソマリ文化」を，ソマリ社会の秩序を実現するものという形で，より「伝統的」な角度から解釈する立場から見れば，表現上シアド・バーレ体制はソマリ民族としての一体性を重視し，氏族間の対立・緊張を緩和するものとしての「ソマリ文化」を破壊したとする評価も出てくることになる。実際1990年代に主にディアスポラの研究者らによって編集された論文集では，こうした指摘が明確になされている（Samater ed.［1994］, Adam and Ford eds.［1997］）。その意味では，「ソマリ文化」と呼ばれている内容を

確認しながら，これとシアド・バーレ体制の関係を改めて確認することが，本章での問題を検討するうえで有用なひとつのアプローチとなる。したがって，シアド・バーレ体制の政策の「ソマリ文化」への意味合いを改めて確認することが本章でのひとつの作業となる。

第２節　シアド・バーレ体制の特徴と変容

１．シアド・バーレ体制の時期区分と体制の変容

シアド・バーレの支配体制は，基本的には以下の３期に分類される場合が多い。第１期が「革命期」で1969年～1976年頃，第２期がオガデン戦争を契機とし，その後一党体制からシアド・バーレ個人に権力が集中する個人による統治へと向かい，国内的な地盤再形成と集権体制の強化を狙った時期で，1977年～1980年代初頭，そして第３期がシアド・バーレ体制の末期に当たる時期で，これは家族・氏族王朝的支配の色彩を強めた時期でもある。基本的には同様の時期区分を念頭に置きながらも，ハシム（Alice Bettis Hashim）の研究では，以上の時期が２つの移行期として読み替えられている。1969年からオガデン戦争が開始される1977年をシアド・バーレの支配のあり方として，ジャクソンとロズバーグによる「個人支配」研究（Jackson and Rosberg［1982］）での類型における「預言者」（Prophet）から「専制君主」（Autocrat）に変質する時期，1978年から1990年が「専制君主」から「暴君」（Tyrant）への移行期である（Hashim［1997］）。ハシムはオガデン戦争後の1978年段階でシアド・バーレは「暴君」となったととらえているので，オガデン戦争をはさんで，シアド・バーレ体制の変質は急速に進んだとみていると考えられる。これらの時期区分は，完全に一致しているわけではないが，上の３つの時期を「個人支配」の類型に即して考えれば，「預言者」「専制君主」「暴君」としての支配時期と読み替えるとらえ方とみることができる。いずれにしても，シアド・

バーレ体制はその20年以上に及ぶ時間のなかで大きく変質していくという点にひとつの特徴を有していた。以下では，オガデン戦争を分水嶺とする２つの時期を検討し，その評価を行っておきたい。

２．1969年クーデタからオガデン戦争へ

1960年の独立後の「議会制期」は，政府のなかでは氏族関係を色濃く反映した人事登用や汚職がはびこり，こうした「パトロン・クライアント関係」からはずれた氏族の間には，政権への不満が渦巻く状況にあった。そのため1969年10月15日に発生したアブディラシード・アリ・シェルマルケ（Abdirashid Ali Shermarke）大統領の暗殺とそれに続くシアド・バーレのクーデタを肯定的に評価する近代化パラダイムの影響を受けた議論が見られた（Laitin［1976］）。

1969年10月21日には軍がモガディシュを制圧し，11月１日にシアド・バーレ少将が最高革命評議会（Supreme Revolutionary Council: SRC）議長への就任宣言を行い，ここにその後20年を越えて続くシアド・バーレ体制が樹立されることになる。シアド・バーレは国名をソマリア民主共和国（Somalia Democratic Republic）と変更したほか，1970年10月21日には「科学的社会主義」（scientific socialism）路線への転換を表明する。ここには，文民政権期における混乱を招くことになった氏族主義，汚職，縁故主義等に抗する政策を打ち出す必要性が認識されていたことが示されているといってよい。こうした初期の政策について検討しよう。

⑴　行政機構

まず，SRCである。これは24名の将校から構成される，唯一最高の法・政策決定機関であった。SRCはSRCのメンバーによって任命された（文民閣僚からなる）閣僚評議会（Council of Secretaries）による支援を受けており，閣僚評議会が日常的な行政手続きを遂行する組織として位置づけられていた（Samatar［1989: 118］）。クーデタの後，地方行政においてはそれまでの文民の知事

（governors）や行政官（commissioners）のポストを軍人が占めることになった。初めの１年半ほどの期間は，現地からの人事採用をまったく行わない形での行政が施行されたが，1971年，地方レベルにも革命評議会（Regional and District Revolutionary Councils）が設立され，地方行政の下支えを行う体制がとられることになった。中央から任命された知事や行政官は，それぞれの革命評議会の構成員を選抜し，自動的にその議長を兼ねる形になった。こうした経緯から類推されるように，地方の知事や行政官はSRCにのみ責任を負うのであり，末端の人々はこうした行政による権力の横暴があったとしてもそこでの保護の手段を持たない統治形態でもあった（Samatar［1989: 118］）。

1976年にソマリア革命社会主義党（Somalia Revolutionary Socialist Party: SRSP）が設立されたが，上記の構造は地方の評議会が政党に姿を変えただけでほぼ温存された（Samatar［1989: 119］）。地方における党執行部の任命も中央からなされる形が継続していた。サマターの調査では，ダガーン（Dagaan）と呼ばれる地方の人民会議も「選挙」を通じて選出された人々によって構成されるという建前はとっていたものの，実体は茶番にすぎず，実質的な選挙の実施は行われなかったとしている（Samatar［1989: 119］）。その結果，「分権化」されたとはいえ，実質的には中央集権的な体制が色濃く残存しており，末端の組織であった村落評議会（Village Council）も実質的な機能としては，徴税と政府の命令の伝達に限定されていた（Samatar［1989: 120］）。

⑵　科学的社会主義の導入

すでに述べたように，シアド・バーレは1969年のクーデタから１年後の「革命記念日」にソマリアを構想するイデオロギーとして科学的社会主義[11]を打ち出す。ソマリ語で社会主義を特徴付けるハンティワダーグ（*hantiwadaag*）という言葉があるが，この文字通りの意味は「家畜を共有する」（あるいは「富を分かち合う」）という意味である。そのため，科学的社会主義は当初「知識（知恵）に則って家畜（富）を共有すること」（livestock sharing which sits on knowledge）であるという形に「翻訳」されていた。しかし，この意味があま

りに消極的であるという理由で「知識（知恵）に基づいて作られる家畜（富）の共有」（livestock sharing which is built on knowledge）という形に改めて「翻訳」された（Laitin［1976: 463］）[12]。このもとで銀行の国有化政策や農業（牧畜）重視の資源配分を実施する政策を展開していくことになる（Samatar［1988: Chapter 5, 1989: 120-151］）。

また，この時期の特徴として，「議会制期」の多くの問題に対応するため，「新しいナショナリズム」を指向するともとらえられた政策が実施された。具体的には，公式文書で氏族に言及することを禁止するなど「ソマリ人の団結」を指向し，氏族主義を解消する政策，言説変化を促進する政策が採られたのである（Laitin［1976: 455-462］）[13]。またソマリアにおける「文化大革命」[14] と称されるソマリ語のラテン表記（アルファベット表記）の導入を1972年の「革命記念日」に発表する[15]。ただし，ここで採用された「ソマリ語」は中部および北部の言語Af-maxaadであり，南部の言語Af-maayはこの言語政策において政治的に排除される意味合いを有していた。

男女平等と女性の組織化という点でも新たな政策を施行している。1975年１月に男性と同等の財産権の規定を有する新たな家族法（family law）を導入したほか，ソマリ女性民主機構（Somali Women's Democratic Organization: SWDO）を設立し，女性の政治意識と政治参加を向上させる試みを行っている（Hashim［1997:89］）。しかし，この新家族法の導入に反対する抗議行動を起こしたイスラーム教の指導的立場にあるシェーク[16] 10名を処刑するなど，「宗教的後退傾向」を示す宗教者への反対キャンペーンを行う強権的な姿勢をみせた。

こうした比較的初期の「表」に現れたシアド・バーレ体制が一定の指向性のもとで機能していた点が，ジャクソンとロズバーグやハシムによる「預言者」として類型化される材料となっていたと見られる。さらに，レイティンは「議会制期」との比較のうえで，制度の細部における「民主主義」の要素は減じられ，権威主義的な体制への転換が行われながらも，ソマリアにおける民主政の社会的基盤の回復が始まったとする評価を行ったことも，こうし

た「表」に注目するとともに，「近代化」を肯定的に見ようとする学術的評価の時代性が見え隠れしている（Laitin［1976:468］）[17]。

ただし，「表」向きのレトリックとは裏腹に，シアド・バーレは当初から氏族間関係を政治的目的に利用しようとする方向性を有していた。たとえば比較的早い1972年段階の発言とされる文章のなかにソマリの各氏族に対する認識が示されている（Askar［1993: 7］）。シアド・バーレはダロッド（Darod）氏族のなかでもマジャーティーン支族（Majertain）についてはその権力志向を毛嫌いしていたが，後に優遇政策をとることになるオガデン（Ogaden）とダルバハンテ（Dulbahante）に対しては兵士としての有用性と革命路線の擁護者になりうるとの認識が示されていた。また北部のイサック（Isaq）氏族に関しては，強い嫌悪感が示され政府の職から追放する旨にまで言及している。そしてハウィヤ（Hawiye）氏族に対しては農業者であり，現状認識の甘いグループとされていた。

これに加え，シアド・バーレ体制の「革命路線」にとっての「敵」が当初から認識されていたとされる（Hussein［1997: 171］）。それは，第１に氏族のヒエラルキーのなかで「伝統的に」尊敬されてきた人たち（地位やタイトルが男性血統のもとで相続されるもの）であり，従来の職位を廃して政府任命の職位を新たに設けた。第２に知識人，高学歴者であり，政府の政策に批判的なものは投獄，あるいは処刑されたため，多くの知識人が国外に逃れた。第３に宗教指導者であり，これは上で示した1975年の新家族法導入への反対姿勢を示したシェークの逮捕・処刑に見られるとおりである[18]。そして第４に貿易商や経営者であった。これらは「平等と富の配分」の障害とみなされ，その一部は国有化されたこともあり[19]，多くはビジネスへの関心を失う結果をもたらしたとみられている。

こうした一連の政策について，シャミス・フセイン（Shamis Hussein）はシアド・バーレ体制が「ソマリ民族の伝統，文化，原理，価値への挑戦者」であったとする評価を行っている（Hussein［1997: 172］）。その意味では，「表」向きの近代化路線の陰に隠れる形でシアド・バーレ体制はその当初から，従

来のソマリ社会の大幅な改変をその射程においていたと考えることが可能となってくる。とりわけ1975年に導入された土地法は，特に農業従事者の多い南部[20]において大きな社会変容を引き起こす政策となった（Cassanelli［2003］）。ここでは，伝統的な土地保有が廃止され，土地の国有化が行われ，土地利用のためにはその土地の登記が必要となった。しかし，実際の土地登記は，農業従事者ではなく都市在住で登記制度を利用できるものに有利な形で行われた。特に灌漑可能な農地（Riverine地域）[21] は都市在住の政府関係者が登記し，コメ生産等に従事するようになり，南部における社会関係を大きく変質させるものとなったのである。

⑶ 「恐怖政治」と氏族優遇――「科学的シアディズム」へ――

そして，潜在的なアジェンダとして有していた方向性をより前面に示す形でシアド・バーレは次第に「専制君主」としての特徴を強めていくことになる。たとえば，治安局（National Security Service: NSS）による取締りが厳しく行われたほか，法律の訓練を受けていない軍人による裁判機関であった治安裁判所（National Security Court）における裁判も頻繁に行われるようになった（Lewis［2002: 211-214］）。

さらに，クーデタ，ならび科学的社会主義導入の際の最大の課題として表向きに提起されていた「氏族主義」に基づく政治のあり方を打破することと相矛盾する，言い換えれば氏族関係をより政治化しようとする政策を進めるための政治実践が1970年代半ばにはより明確な形で行われていく。それは，インフォーマルのコードネームM.O.Dとしてソマリ社会に広く流布していた次のダロッドに属する３支族への優遇政策が行われるのである。Mはマレハン（Marehan），Oはオガデン，Dはダルバハンテである（Lewis［2002: 219-223］）。こうしたことから，1970年代半ばまでにはシアド・バーレ体制におけるレトリックと現実の乖離が明らかになる（Samatar［1988］，Lewis［2002］）。また，軍や官僚機構においてはイサックの追放，北部の統治においてはダロッドの将校を配置するなどソマリアにおける統治の「ダロッド化」ともいえる氏族

偏重主義に傾斜していく（Dualeh［1994: 106-107］）。

こうした政策に加え，SRSPが成立した1976年以降，ソマリアの最も重要な５つのポストである，国家元首，軍司令官，高等司法評議会，閣僚評議会議長，SRSP書記局長をシアド・バーレが独占していることに対し，その権力への制度的な制約が欠如していることをアーメド・サマターは問題視した（Samatar［1988:149］）。政策レトリックと現実の乖離がより明確になったこうした状況に対し，ルイスはこの時期における表向きの社会主義体制の内実を評価する際に，社会主義はあくまでも手段であり目的はシアド・バーレのもとでの独裁的色彩を強めることにあるという意味合いで「科学的シアディズム」（Scientific Siyadism）という表現を用いている（Lewis［2002: 223-225］）。これは「預言者」から「専制君主」への変貌と軌を一にするものである。

⑷　オガデン戦争

そして，シアド・バーレ体制を考えるうえで分水嶺と考えられるのが，エチオピアとの間で戦われ，最終的にソマリアが敗北することになったオガデン戦争である。オガデン地方をめぐる歴史的経緯についての詳述は他に譲るが，独立後の「議会制期」以降，ソマリアはオガデン地方の分離独立を基本的に支持する外交姿勢をとってきた。1977年に，オガデン地方における分離独立を目指して戦っていた西ソマリ解放戦線（Western Somali Liberation Front: WSLF）を支援する形でソマリア軍が侵攻し，当初オガデン地方への有効支配を確立した。しかし，10月にはエチオピア側からキューバ・ソ連との共同戦線のもとで反撃が開始される。これを受け，ソマリアは1974年にソ連との間で締結していた友好・協力条約を破棄するという事態が生じる。これに伴い，ソ連からの軍事顧問の国外退去を命令する一方，600名のソマリア人士官訓練生がソ連から強制送還された。この事態を受けシアド・バーレは1978年には，ソマリアが期待していたアメリカからの軍事支援を停止されて孤立状態に陥る。最終的に同年３月にはオガデンからの撤退を余儀なくされるとともに，オガデン地方からの大量の難民がソマリアの北部に流入する事態を招く結果

となった。

このオガデン戦争の敗北の短期的な結果として，レイティンは以下の３点を挙げている。第１にソ連，アメリカ，アラブ諸国が支援を行わなかったことにより，ソマリアとシアド・バーレは屈辱的な対応をうけたこと，第２に第１の点の裏返しでもあるが，シアド・バーレ体制の外交上の能力への懐疑が増長されたこと，そして第３にシアド・バーレ自身の指導力そのものへの疑念が浮上してきたこと，である（Laitin［1979］）。こうした影響は具体的な形を取って表面化することになった。オガデンからの撤退の直後にハルゲイサ(Hargeisa)で行われたオガデン戦争に関する軍部との事後分析会合では，一部将校からシアド・バーレの指導力そのものを厳しく問う発言が相次ぎ，シアド・バーレはこうした将校17名を処刑している（Samatar［1988: 137-138］）。さらに1978年４月には「マジャーティーン支族の将校を中心とした」とされるクーデタ未遂が発生する[22]。オガデン戦争の敗北を受けて発生したこうした一連の事件は，シアド・バーレ体制のさらなる変質を誘発していくことになる。

３．オガデン戦争の余波から家族・氏族王朝的支配[23] へ

この時期は，「個人支配」の類型で言えばシアド・バーレが「暴君」としてのあり方を「完成」させる時期であると同時に，国家としてのソマリアは「失敗国家」(failed states)[24] に向かう時期でもある。以下ではその過程を記述していくことにしたい。

⑴　シアド・バーレ体制の再構築

オガデン戦争の敗北のなかで，特に西側諸国との関係を維持し，体制の正統性を確保するねらいもあって，1979年１月に新憲法を発表する形で軍政からの民政移管を行った[25]。ここには「国家安全保障」が個人の権利に優先するといった内容が含まれていたほか，司法の独立の保障が十分に担保されな

いなど，大きな問題を抱える内容であった（Samatar［1988: 140-141］）。しかし，同年８月の国民投票では99％の支持をもって憲法案は信任され，見かけ上は正統な手続きを経た新憲法が制定される形になった[26]。こうして一党体制が制度的に成立することになる。また，同年12月には「人民議会」選挙が実施された。

こうした国内的な政権の「正統化」の試みと並行して，新たなパトロンとしてのアメリカとの関係構築の動きが活発に進められたのもこの時期である。1980年８月にはソマリアとアメリカの間で，アメリカのベルベラ港とベルベラ空軍基地の軍事使用とアメリカからソマリアへの5300万ドルの経済援助と4000万ドルの軍事援助の供与が合意されている。

しかし1980年10月には，上述したオガデン戦争に伴って発生した北部への難民問題[27]に対応するため，国家非常事態が宣言され，一時的に軍事政権に逆戻りしてSRCが復活するという事態になる[28]。

⑵　反政府勢力の結成と内戦――「失敗国家」化――

オガデン戦争の余波は，国内外における反シアド・バーレ体制を掲げる反政府勢力の成立に拍車をかけることになった。1981年には1978年のクーデタを企てたとされたマジャーティーンが中心となって，エチオピア領内でソマリ救世民主戦線（Somali Salvation Defense Force: SSDF）がゲリラ組織として活動展開を開始する。また，同年シアド・バーレ体制下で冷遇され続け，またオガデン戦争後に多くの難民が流入したことによってシアド・バーレ体制に対する最も強い批判勢力であったイサックがロンドンでソマリ国民運動（Somali National Movement: SNM）を結成すると同時に，エチオピアにも拠点を形成した。こうした状況への対応として，海外での反シアド・バーレ体制を監視するために大使館はディアスポラの監視機能をその重要な任務とすることになるほか，国内での厳しい情報統制が続けられていく（Lewis［2002: 250-251］）。

こうした反シアド・バーレ体制の姿勢を明確にとる組織の形成を受け，特に氏族帰属を利用する形で，その時点での「味方」にその時点での「敵」と

対峙するための武器供与を行うという形の「分離支配」がさらに貫徹されていく（Lewis［2002: 252-254］）[29]。しかし，こうした対応はオガデン戦争後国境を越えて数多く流入し始めていた武器の流通をさらに加速し，ソマリア国内における武器の闇市場で流通することを助長した。この結果，反政府勢力はそれぞれ武装組織としての形態を整えていくことにもつながった。SNMなどの勢力が結成されたことにより北部に対しては厳しい軍事・経済的報復措置がとられた。1987年には，SNMが北部を占領するまでに勢力を拡張した。これに対し，シアド・バーレは1988年にエチオピアとの間で平和協定を締結し，相互に国内に拠点を持つ相手国側の反政府勢力への支援を中止することを合意したため，SNMはエチオピアにおける拠点を失い，ソマリア国内に流入し，政府軍との間で激しい戦闘が行われる事態に至った。この結果，北部の州都ハルゲイサは廃墟と化すなど，1980年代末には北部を中心に「内戦」状況に向かう。

⑶　縮み行くシアド・バーレ体制

こうした国内状況のなか，シアド・バーレは1986年５月には交通事故で瀕死の重症を負い，サウジアラビアにて治療を受けている。６月には職務に復帰しているものの，体力的な衰えは隠すことができないものであった（Lewis［2002: 254］）。この間，上級副大統領ムハマド・アリ・サマター（Muhammad Ali Samatar）が憲法規定のもとで大統領代行を務め，シアド・バーレの不在中の政権転覆などの策謀を未然に防ぐために非常事態を宣言した。この対応は，政権内部のオガデンとダルバハンテによって構成された「憲法派」（constitutional faction）と呼ばれるグループと親族系列に当たるマレハンのみによって構成された（しかもその一部の支族に偏った）「５人のギャング」（“Gang of Five”）双方の支持を得るものであり基本的には従来のM.O.Dの枠組みを維持するものであった。しかし，復帰後のシアド・バーレはこうした対応へのなんらの評価も行わなかったことを受け，1969年の政権奪取後初めて広く「シアド・バーレ後」が議論されるようになっっていく（Lewis［2002:255］）。

同年９月には党中央委員会がシアド・バーレの大統領任期の７年延長を提案し，11月にこの件がSRSP総会で承認された。そして12月に行われた選挙では99.9%という異常な「高支持」で大統領に再選される。

こうした国内状況の背後で，シアド・バーレの登用体制も1970年代半ばまでとの間で大きな変化を呈するようになっていた。言い換えるとM.O.D.からの登用体制が崩れ，特に1986年の事故以降の時期には，より狭い範囲からの登用が図られるようになる。より具体的にはマレハンの政府部内における突出傾向が顕著に見られるようになったのである。これは，シアド・バーレ体制が内に籠もる（inversion），あるいは縮み行く（shrink）状況と表現できるかもしれない。そしてそのネポティズムのあり方は，「憲法派」からの離脱と「５人のギャング」派の偏重という形に傾斜を強め，最終的には「チャウシェスク・スタイル」とも称される家族偏重の人事登用の色彩を濃くしていくまでに至る（Hashim［1997:104］）。

⑷　シアド・バーレ体制の崩壊と「崩壊国家」への道程

ソマリアでは各地で反シアド・バーレ体制の動きが加速していく。シアド・バーレは反体制派の民主化要求にこたえる用意を再三口にするものの実行を伴わず，反シアド・バーレの姿勢はさらに強まることになった。1989年７月には2000人の反政府活動家を逮捕したほか，９月には政府軍による激しい弾圧が行われた。そのため，1990年には人権侵害を理由として海外からの援助が停止され，結果的にはシアド・バーレ体制が首都モガディシュの外には支配が及ばない状況を招き，シアド・バーレは「モガディシュの市長」（“Mayor of Mogadishu”）と考えられるほどにその支配力を喪失する状況に至る（Lewis［2002:262］）。

1990年５月にはモガディシュで戒厳令が布かれ，また６月にはソマリアの知識人や有力者114名から構成された非武装のグループであった「マニフェスト・グループ」が「モガディシュ声明」を発表する。ここには，シアド・バーレ大統領の辞任のほか，選挙による暫定政府の樹立等が要求されていた(30)。

SNMは1990年12月から1991年１月にモハメド・ファラー・アイディード（Mohamed Farah Aideed）率いる統一ソマリ会議（United Somali Congress: USC）の民兵がいっせいに蜂起し，首都モガディシュで激しい戦闘を行い，軍・警察の本部を占拠したほか，大統領府にも進攻し，シアド・バーレを追放した。USCは１月27日に勝利を宣言したほか，「マニフェスト・グループ」との協力のもと暫定大統領としてUSCの創始者の一人であり，また「マニフェスト・グループ」の主要メンバーでもあったアリ・マフディ・モハメド（Ali Mahdi Mohamed）が提案された。しかし，民主的な政権樹立のための国民議会開催を要求していた他の勢力に加え，アイディードもそれに反対し，USCの分裂と他の武装勢力との糾合が繰り返される形で戦闘が激化していくことになった。こうしたなか1991年４月には，シアド・バーレが勢力を盛り返しモガディシュ西部に迫ってきたため，アイディードが中心となって新たに結成されたソマリ解放軍（Somali Liberation Army: SLA）が最終的にシアド・バーレを打倒した。シアド・バーレはその後ケニアに逃亡し，そこからナイジェリアに亡命した。アイディードとアリ・マフディ間の対立は，同じハウィヤ氏族の支族であるハブルゲディル（Habr Gedir）とアブガル（Abgal）間の「初めての」対立という側面を持った。それは，もともとの支族間の対立の帰結ではなく，氏族（支族）を利用しようとする権力者の側からの働きかけでが氏族対立が作り出され，動員のための道具として用いられるという問題でもあった（柴田［1993: 53-56］）。

第３節　「崩壊国家」ソマリアの解釈論

「崩壊国家」ソマリアの生成は，すでに述べてきたようにシアド・バーレ体制後の中央政府樹立をめぐる氏族，あるいは支族の政治エリート間の政治権力争いの結果であったと見ることは可能である。そして，中央政府樹立を目的とした共通の足場を築くことができなかったことが短期的な「出来事」と

しての「崩壊国家」状況を説明するうえでのひとつの原因にはなっている。しかし，これを中期の「過程」として検討するためには，改めて本章でのシアド・バーレ体制の議論を吟味し直す必要がある。そこで本節でははじめに「崩壊国家」ソマリアのもとで生起した現象を確認し，それを「ソマリ文化」と第１節で述べたこととの兼ね合いで解釈を加えることにしたい。その際に，改めてソマリア研究の新潮流の議論をも参照して議論を進めていく。

１．「崩壊国家」ソマリアの諸相

1991年１月に首都モガディシュの中央政府を失ってから，ソマリア全土を実効的に統治する政府は存在しないが[31]，北西部に位置し，1991年５月18日に旧イタリア領との1960年の合併条約を破棄して，旧イギリス領を版図として踏襲して独立を宣言したのがソマリランドである。この独立の動きを進めた勢力はシアド・バーレ体制と対峙する形でイサック氏族により設立されたSNMであった。この後，ベルベラ（Berbera）やブラオ（Burao）などソマリランドの主要都市においてイサックとそれ以外の氏族間の軍事対立が生じる事態にまで発展した。この過程でSNMは機能不全に陥り，これに代わって氏族の長老たち（の会議）（*Guurti*）が紛争下にあったソマリランドの秩序回復に大きな役割を果たした。1991年から1993年までの間に*Guurti*による和解のための会議は９回行われているが，その中でも1993年１月24日から同年５月までボラマ（Borama）で開催された国民和解のための大会議（通称ボラマ会議）にはソマリランドのすべての氏族の長老150名が参加し，ソマリランド全体の長老会議という形態がとられた。このもとで，後に比較的安定した民主主義体制の礎が作られていく。

さらに北東部[32]では，ダロッド氏族のマジャーティーン支族を中心とした反政府勢力であったSSDFが，支族の長老たちを交えた政権会議を1998年５月から約３カ月にわたって開催し，最終的に７月23日にガロエ（Garowe）を州都とする自治政体プントランドを設立した。ソマリランドとは異なり，分離

独立ではなく将来の再建されたソマリアを連邦制とし，そのもとでの自治権限の拡大をその方向性として示し，一定の安定を実現してきたほか，現状ではTFGを支援するスタンスをとっている。これに加え南部のRiverine地域でもレウィン（Rewin）氏族のディギル（Digil）支族とミリフル（Mirifle）支族を中心とした政体形成の試みが1990年代半ばになされたが，ソマリランドやプントランドのような政体としての一体性を作り上げるには至らなかった(33)。また，首都モガディシュでは，市内を「軍閥」が占拠する事態が継続したあと，1990年代半ば以降，イスラーム法廷やイスラーム系の慈善団体が政府に代替する形で治安などの公共財提供を行ってきた。この文脈でモスクは武装勢力の攻撃を回避でき，物理的に安全が提供される場としての意味を持つようにもなった（Marchal［2004: 123］）。しかし，その一部が国際的なテロのネットワークであるアルカイーダとのつながりも指摘されるイスラーム原理主義のグループでもあったことから（Tadesse［2002］），エチオピア，アメリカによる最近のUIC掃討の動きが生まれているわけである。

ここではこれらの試みの詳細についてこれ以上は検討する紙幅は残されていない。むしろここで提起しておきたい論点は，「崩壊国家」という状況下で，この「国家」を構成する領域内での秩序の形成という点において大きな相違が地域的に存在しているということである。この問題を，本章の主題であるシアド・バーレ体制との関わりで以下検討することにしたい。

2．ソマリ民族一体性の「神話」をめぐって

すでに述べてきたように，シアド・バーレ体制はその当初一見するとソマリ民族の一体性を堅持しながら国家建設を進めるというレトリックを用い，「預言者」とも評価される「個人支配」のスタイルを打ち出したが，実質的には，特定氏族の優遇政策，氏族間の「分割統治」がその根幹をなしていくことになった。言い換えれば，氏族主義（clannism）(34) がソマリアの政治の中核をなしていくということでもある。そのなかで，特に冷遇された北西部のイ

サック氏族がソマリランドの独立を宣言したことは，シアド・バーレ体制の政策が大きく影響を与えている（遠藤［2006］）。それだけでなく，シアド・バーレ体制末期，さらに1991年の「崩壊国家」以降，氏族または支族を対立軸として紛争が現象化してきたことは，こうした氏族間の「分割統治」を貫徹させたシアド・バーレ体制の帰結である側面を有していた。同時に，北西部や北東部などで新たに新政体が樹立されてきた地域では，既存の支族関係が温存され長老に政治的な権威を認める「伝統的」な紛争解決のメカニズムが機能しえたことが，「崩壊国家」のもとでの部分的な秩序実現に貢献してきたと見ることができる。

しかし，「崩壊国家」状況下の南部だけは，既述のようにその状況が大きく異なった。先行研究のなかでも扱ったようにソマリ民族の一体性については，ソマリア研究の新思潮のなかで様々な疑義が呈されてきていた問題であった（たとえばAhmed［1995］）。特に南部の19世紀ソマリ社会形成を研究する立場からは，東アフリカからの「奴隷労働」の存在が指摘されてきたほか，そのソマリ民族への同化と階層化の問題が指摘されてきた（Besteman［1996b］）。これはソマリ社会のなかに人種関係が封入されることとしても論じられてきた。「同化」した「奴隷」は，「アフリカ的」な肉体的特徴を残していたことから*jareer*（硬くよじれた髪という意味で，転じてバンツー的，アフリカ的という意味）と呼ばれ，*bilis*（高貴で，「純粋な」ソマリ民族）と対置されて，ソマリ社会のなかに位置づけられていくのである。そして植民地統治下においてもその「人種」的差異が利用されたため，それ以外の地域と比較して，南部ソマリアの氏族関係は非常に複雑なものとなっていったとされる（Besteman［1996b: 583-585］）。つまり，ソマリ民族は歴史の過程で創造されてきたとする議論である。

こうした南部の複雑な社会関係をより複雑化する形で作用したのがシアド・バーレ体制下の1975年に導入された土地法であった。この政策の結果，農耕地の利用形態が変化し，本来居住していた氏族以外の（シアド・バーレ体制のもとで優遇された）氏族が軍人，あるいは商人の形態をとって流入してき

たのである。ここで,「伝統的」な指導者の相対的な没落が典型的に生じ，長老を中心とした紛争解決のメカニズムもその役割を減じていったと考えられる。しかも,「崩壊国家」以降の時期，南部は住民武器獲得のネットワークから外れ,「軍閥」などの「外部者」(「解放勢力」）による土地の再収用の犠牲として位置づけられたほか，最も激しい戦闘に巻き込まれ（Besteman［1996b: 590］),ほかの地域のような紛争解決のメカニズムがまったく機能しない事態に陥った地域でもあった（Brons［2001: 287］)。さらに，難民として隣国に出ざるをえなかった多くは南部の氏族を構成してきた*jareer*であったとの指摘もなされている（Besteman［1996b: 590］)。言い換えれば，シアド・バーレ体制下での特定氏族の優遇と土地法の導入が，氏族関係の異なる北部と南部において異なった結果を生み，北部では「伝統的」な紛争解決メカニズムが機能しえたものの，南部ではその役割を減じる形になった。したがって，ソマリ社会の形成における歴史的,そして政策的な地域間の相違によって,「崩壊国家」ソマリアの内部的多様性が生み出されたのである。

3．ソマリ社会の秩序観

上記の新思潮とは異なる立場から，伝統的なソマリ社会を前提し，それを秩序付けてきた２つの柱としてアーメド・サマターは親族関係とイスラームを挙げている（Samatar（Ahmed）［1994］)[35]。男系の血統的な紐帯はトル（*tol*）と呼ばれ，ソマリ民族の社会関係の基底的な部分を構成しているほか，婚姻を通じた紐帯であるヒディド(*hidid*)を通じて妻の親族との関係が約定されている。また，ヒール（*heer*）と呼ばれる慣習法により親族間の関係が秩序付けられている。これによって共同体の生活様式が保護されたり双務的な義務・権利関係が規定されたり，犯罪行為の認定と処罰が行われてきた。そしてこうした秩序の実現が長老の手にゆだねられて運営されてきたことであり,その長老が政治権力を体現するものとして意味づけられてきたわけである。ソマリ社会を秩序付けるもう一方の柱がイスラームである。クルアーン

（コーラン）とハディース（ムハンマドとその教友の言行録）に依拠するクァヌーン（*qanoon*）がヒールと並んで秩序を実現するものと理解され，それを体現するのがシェークであった。クァヌーンは人生，威厳，忍耐，義務，信仰者の連帯，敬神，真実，悔悛といったことに敬意を払うことを説くものとされていた（Samatar（Ahmed）［1994: 111］）。こうしてクァヌーンとヒールは国家なきソマリ社会に対する秩序を与える正統な政治活動の中心的な位置を占めてきたと理解され，それによって道徳的な社会・共同体（moral commonwealth）としてのウンマ（*umma*）[36] が実現されていたと見られていた。

そのうえで，この秩序の構成要素が選択的に，そして政策的に壊されることによって，氏族主義的な政治が現れるという解釈を示している。言い換えると，ヒディド，ヒール，クァヌーンが政策のもとで失われ，トルだけが国家権力，あるいは私的蓄財と結びついて機能するときに，氏族間対立が顕在化する政治が出現するのである。この説明に添えば，シアド・バーレ体制はヒールとクァヌーンを段階的に破壊し，サマターの指摘するような氏族主義が台頭することを許し，その最終的な帰結として両者の完全なる崩壊状態として「崩壊国家」ソマリアが理解されるということになる（Samatar（Ahmed）［1994: 129］）。実際，上述のように，シアド・バーレ体制のもとでは，その当初から近代化路線，世俗主義が前面に押し出され，クァヌーンの役割を後退させる政策（ソマリ語のラテン語表記導入や新家族法導入，そしてそれに反対するシェークの処刑など）がとられた。さらに1970年代と1980年代（特に後半以降）において人材登用のあり方に大きな変化が見られ始めた。言い換えればM.O.D.というダロッド氏族の３支族のなかでも自らが属するマレハンにその対象が縮小していったが，これはトルが独占的，排他的にソマリアの政治文脈において機能する段階に達したという解釈につながるものとなる。こうしたことから，シアド・バーレ体制は，回顧的にその体制の評価が行われる場合，特にイスラームとの関係では容赦ない近代化政策のもとでの「伝統の破壊者」の体制（Mazrui［1997］）と評価されるほか，遊牧民の文化のなかでは手に負えない氏族間の不均衡をもたらした体制（Geshekter［1997］）との解

釈にもつながってきた。

そして，こうしたソマリ社会の秩序を構築してきたと考えられる構成要素の大幅な後退現象は「崩壊国家」後の首都モガディシュに出現したモリャーン（*Mooryaan*）[37] と呼ばれるようになる若者を中心とした戦闘者のあり方に象徴的に示されることになった。モリャーンの詳細についてはマーシャルの研究（Marchal［1997］）に委ねるが，ブロンスが整理しているように，伝統的な権威に対する敬意を決定的に欠いている点が共有される特徴となっている（Brons［2001: 228］）。しかし，モガディシュではこうした若者の暴力から逃れる場としてモスクが位置づけられたほか，シアド・バーレ体制のもとではその役割を後退させられたイスラームの役割が増大した。完全に機能を喪失した政府に代替して物理的・心理的安全を提供する機能をイスラームに求める志向性が強まる傾向が見られたことがその背景にあった。実際，モリャーンは「宗教的な人々」を疎む傾向があったにもかかわらず，こうした人々を攻撃することにより神からの反撃を受けるのではないかとの畏れの念を有するような精神構造があった（Marchal［2004:123］）ことが指摘されている。したがって，ここには南部の人々に間にクァヌーンの復権のもとでの安全の確保が志向されていたことがうかがえ，これが後のイスラーム法廷の影響力の増大と結びついていったと考えられる[38]。

４．シアド・バーレ体制と「ソマリ文化」

はじめに示したアリ・ジマール・アーメドによる解釈としての「シアド・バーレ＝『ソマリ文化の真正な体現者』」と，上記の「シアド・バーレ＝『ソマリ文化の破壊者』」との評価は一見正反対のように見えるかもしれない。しかし，そもそも「ソマリ文化」に対する基本的なとらえ方の異なる論者による評価であることに改めて注意する必要がある。アリ・ジマール・アーメドのように，ソマリ民族の一体性がそもそも「神話」であり，「ソマリ文化」自体が歴史的に「創造」されてきたことを前提とすれば，シアド・バーレ体制

こそソマリ民族の神話性，言い換えれば氏族分断状況とも言える「民族」内部の差異を明確にそして極限にまで顕在化させたという評価がうまれることになる。それに対し，アーメド・サマターのように伝統的なソマリ民族の一体性を前提とすれば，シアド・バーレ体制は，それを構成していた諸要素の機能を失わせた破壊者という解釈につながる。したがって，シアド・バーレ体制への評価が分かれているように見えるが，実はそれは「ソマリ文化」あるいは「ソマリ社会」の見方の違いに由来するものであり，実際にはほぼ同じことを別の形で表現しているのである。

そして，そこにあるのは，地域的相違，あるいは内部的多様性を呈し，どのような形で復元可能であるかが分からないところまでその一体性を喪失した「民族」と「国家」のあり方である。それが，「崩壊国家」としての持続性を支える形になっていると考えられる。この状況をどのように克服し，復興が可能であるのか。アリ・ジマール・アーメドは既述のように新たな倫理の構築を課題とし，またアーメド・サマターはソマリアの一体性の回復をアジェンダとし，あらためて細分化することを望まない（Samatar［1994:136］）。それに対し，例えばブロンス，あるいはドーンボスは，むしろソマリア内部の個別的な自生的な秩序形成を優先することを主張し，「崩壊国家」をソマリ民族にとっての国家形成におけるひとつのチャンスとして位置づける。こうした状況は，改めて「ソマリ民族」とは何か，そして「ソマリ民族」にとっての国家とは何かという，国家形成における古くて新しい問題を提起しているのである。

おわりに

本章では，シアド・バーレ体制と「崩壊国家」ソマリアの関係を，一方でシアド・バーレ体制の性格の変容を検討する形で，そして他方で「崩壊国家」という状況から回顧的に再検討する形で，考察してきた。そこで明らかに

なったのは，シアド・バーレ体制が「崩壊国家」生成の布石を打つ政策を行ってきたことであった。その意味では，シアド・バーレ体制は短期の「出来事」としての「崩壊国家」生成に深く関与していたことを確認したことになる。しかし，中期の「過程」としての「崩壊国家」の持続に関して考えると，その関係は単純ではない。その政策が，伝統主義的な立場から見たソマリ社会の秩序構成要素の機能を後退させたということは可能である。それが修復・回復できないほどの機能不全に陥り，そのことが「崩壊国家」状況を持続させている面は否めない。しかし同時に，「ソマリ民族」と国家との関係性というより根源的な問題が関わっていることが，シアド・バーレ体制の遺制の意味をより見えにくいものにしているからである。したがって，「過程」とシアド・バーレ体制の関係性は，時間的にこの先に訪れる「新しいソマリア」の姿が見えた段階で初めてその答えが見えてくる問題と考えられる。

したがって，本章は「ソマリ民族」にとっての国家が今後どのように再構築されうるのかが不透明な過渡的な段階において，シアド・バーレ体制をソマリの歴史のなかに位置づけようと試みた一試論の域を出るものではない。

〔注〕――――――――――――――――

⑴　TFGは政府間開発機構（Intergovernmental Authority on Development: IGAD）の支援のもと，2004年ケニアで設立されたものである。

⑵　本章では改めて「崩壊国家」概念を論じないが，基本的には以下のようにとらえている。「崩壊国家」は，中央政府が完全な機能不全に陥り，公共財は私的にあるいはアドホックにしか提供されないほか，権威の空白が生じている状態である。「崩壊国家」の場合，最も重要な公共財である安全は，特定の領域を実質的に支配する，「軍閥」（warlord）などの強者によって提供される。この定義については以下を参照のこと。Rotberg ed.［2003，2004］，遠藤［2006］。

⑶　この概念については，たとえばBahcheli et al.［2004］を参照のこと。

⑷　この概念化については，Kingston and Spears eds.［2004］を参照のこと。

⑸　一部の研究者の間には，ルイスの研究での植民地統治下におけるイギリスの役割の評価等をめぐり，異論が唱えられている（Ali［1995］）。

⑹　同じ氏族に属するものは，それぞれ同じ祖先から発生し，それぞれ父系制をさかのぼって20世代以上の名前を有しているとされる。この20前後の名前のうち最後に近い特定の名前が支族名，中位の特定の名前が支族名，上位の特定

の名前がディヤ集団をあらわしており，名前がその人の「身分証明」の形になると同時に，その帰属を如実に示すものとなる。そのため，ソマリアでは子供のころからこの名前を覚えるように徹底した教育を受ける（柴田［1993: 20］）。なお，ディヤは「血税」（アラビア語でdiya）を納める集団であり，最も帰属意識の高い集団と考えられる（Lewis［2002: 11］）。

⑺　ただし，トリポディによれば，この際の会議のペーパーを編集した論文集がイタリア文化省から出版されたのは1996年であり，イタリアは依然として植民地研究に十分な関心を寄せていないと見られている（Tripodi［1999: 6］）。

⑻　第２次国連ソマリア活動（UNOSOM II）のことを指している。UNOSOM IIはこれに先行する形で存在し，人道援助活動のための安全な環境の確保を目的として活動を展開した統一タスクフォース（UNITAF）の後継のミッションである。1993年３月の国連安全保障理事会の決議を受けて，5月から活動を行ったが対立する氏族間の武装解除を早急に実現することが和平の達成に不可欠との認識のもと，必要とあれば強制措置をも執りうる権限が付与された。しかし，同年６月の現地武装勢力（アイディード将軍派）によるUNOSOM IIのパキスタン要員への襲撃事件を契機にアイディード派の武装解除とアイディード将軍の逮捕を目的として強制措置も講じられたが，かえってアメリカ兵18名を含む双方の犠牲を増やす結果を招き，撤退を余儀なくされた。

⑼　批判的安全保障の視座とは，基本的には国家の能力と役割を相対化するとともに，広く個人と社会を安全保障の対象とし，軍事的な側面に限らない安全を考慮する立場と考えられる（Brons［2001: 66］）。

⑽　アリ・ジマール・アーメドはこの「倫理」についての詳細を述べているわけではないが，現在の（氏族間対立という）悪循環を絶ち，氏族関係を経て「公正な社会」（just society）に備え，また想像できる力を付与された「彼岸」（the other side）に抜け出すようなことが可能となる解放の政治（a politics of emancipation）を希求する必要性を提起している（Ahmed［1995: 151-152］）。

⑾　シアド・バーレは当初よりマルクス・レーニン主義についてはほとんど理解していなかったことが指摘されてきた（Laitin and Samatar［1987: 109］）。

⑿　ライティンは家畜，知識と「翻訳」しているが，ハシムは富（wealth）と知恵（wisdom）と「翻訳」しているので，ここでは併記しておく（Hashim［1997: 83］）。

⒀　たとえば“ cousin ”（*ina'adeer*）の代わりに“ comrade ”（*jaalle*）を用いるなど，具体的に用語法上の制約が設けられた。

⒁　ライティンはこれに関して革命と復興の奇妙な融合という形で表現している。この詳細についてはLaitin［1976］を参照のこと。

⒂　この表記方法をめぐってはアラビア語かラテン語表記かについて論争があったが，これに一定の決着がつく結果となった。ただし，ソマリアの固有名詞等のラテン語（アルファベット）表記については統一されていないため，複

数の表記が混在している状況にある。この問題は以下でも指摘されている。Ahmed［1995］。

⒃　シェークは敬虔なイスラーム教徒で僧侶の立場に相当する。

⒄　こうした見解に対しては，1980年代における研究においては批判が出ていることは想像に難くない。たとえば以下を参照。Samatar［1988: Chapter 8］。

⒅　その後も，イスラーム勢力がシアド・バーレ体制のもとで何らかの有力な政治勢力となったとする解釈は，体制への反対勢力形成を中心とした政治がより氏族化していくことから，ほとんどなされていない。こうした政治の趨勢のほかの要因として，ソマリ社会のなかでは年長者が「権威」を有することから，政治的イスラームの指導者の「若さ」は評価されなかったことなどが指摘されている（Marchal［2004］）。

⒆　多くの産業が国有化されたものの，二大輸出産品であったバナナと家畜だけは国有化されなかった。家畜生産者については「労働者」という認識が示されたほか，バナナ産業は「国民経済発展に資する」という理由付けがなされている（Laitin and Samatar［1987: 110］）。

⒇　この地域は植民地化以前の区分けでは，アッパー・ジュバ（Upper Juba），ローアー・ジュバ（Lower Juba），モガディシュを含むベナディール（Benadir）の３地域からなる地域であり，1975年以降の地域行政の区割りではバコール（Bakol），ベイ（Bay），ミドル・シェベル（Middle Shebelle），ベナディール，ローアー・シェベル（Lower Shebelle），ミドル・ジュバ（Middle Juba），ゲド（Gedo），ローアー・ジュバの８地区にほぼ相当する（図２を参照）。

(21)　これはジュバ川（Juba River）とシャベル川（Shabelle River）に挟まれた地域を主に指す概念である。

(22)　アーメド・サマターは，この問題について，はたして一部氏族のみの意向によるクーデタの企てであったか否かを注意深く検討する必要を指摘している（Samatar［1988: 138］）。実際には，この失敗のあとにマジャーティーンの多くが国外に逃亡せざるをえなかったとされる。ここで提起されているのは，ソマリア研究における「氏族」をどのようにとらえる必要があるのかという方法的な問題にもかかわるものである。

(23)　この表現はルイスによる（Lewis［2002: 254］）。

(24)　本章では，「失敗国家」について，基本的に以下のように理解される概念として考える。「失敗国家」を特徴付けるものとして，暴力（あるいは武力紛争）の程度が激しいということ以上に，⑴その暴力が持続的であること，⑵その暴力が経済活動と連動していること，⑶その暴力が既存の政府に対して行われていること，⑷その結果として，暴力の行使がさらなる権力獲得の手段として暴力主体の間で正当化されていること，などが挙げられる。とりわけ，国家が住民を抑圧し，国内の安全を剥奪する行為を行う点に特徴がある（Rotberg ed.

［2004: ４］）。

㉕　民政移管の動きは，先にあげた1976年のソマリア革命社会主義党の設立にその端緒を見出すことができるものではある。

㉖　実質的には，国民投票の際の雰囲気や「自由と公正」に関しては多くの疑問が指摘されている（Samatar［1988:141］）。

㉗　ソマリアへの「難民」の流入の実態に関しては，公式発表されている難民の数と実際の難民の数の間には大きな乖離があるという指摘がなされている（オガデン戦争後10年間の「難民」数は84万人とされているが，実際にはその半数程度ではないかと推測されている）ほか，「難民」がシアド・バーレの下支えのために「招かれた」という問題が指摘されてきた（柴田［1993］）。

㉘　SRCは最終的にはシアド・バーレが初めてアメリカを訪問した1982年３月に廃止された。

㉙　それはたとえば以下のような形で現象化した。SNMの成立とイサックの脅威への対抗という動機のもと，シアド・バーレは国外追放されてエチオピアにいるマジャーティーンのリーダー（SSDFのメンバー）に恩赦を与えようと試みた。これは，ソマリアに戻りシアド・バーレ体制を支持するという条件のもとで，有利なビジネスの機会と国軍におけるポストを提供するというものであった（Hashim［1997: 104］）。こうした形の「分離支配」は1980年代末により大掛かりな形で行われ，軍の保有する近代兵器が体制を支持する支族に分配された（柴田［1993: 48］）。

㉚　これを受けて，シアド・バーレ政権は1990年６月にメンバー45名を逮捕し，裁判で死刑を含む長期刑が科されたが，モガディシュでの大衆行動により全員が釈放されている。

㉛　ソマリランドの樹立の過程で1980年代末には，北部はSNMの支配下にあったように，ソマリアの中央政府の実効的な統治は一部の地域にしか及んでいなかった。

㉜　1975年以降の地域行政の区割りでは，バリ（Bari）とヌガル（Nugal）の２つの地区に相当するがソマリランドとの境界については問題が残されている（図２を参照）。

㉝　この経緯の概要については，Brons［2001: 260-263］を参照のこと。

㉞　これと同じことをドーンボスらはソマリア政治の「部族化」（tribalization）という形で表現している（Doornbos and Markakis［1994: 14］）。

㉟　アーメド・サマター自身，こうした解釈はソマリ社会がなんらの社会制度を持たない氏族的な社会であることと対置される考え方であることを断っている（Samatar Ahmed［1994: 111］）。

㊱一般にウンマはイスラーム共同体を指す概念として用いられているが，ソマリ社会では，むしろソマリ民族に近い意味合いを持つ概念であった（Samatar

Ahmed［1994: 142］)。

(37) 1992年ころから使われ始めた言葉で，戦闘者を意味し，西洋風の服装をしている者を指す。ただし，用いる支族により意味合いは微妙に異なるほか，起源についても諸説がある。これについても，Marchal［1997］を参照のこと。

(38) 「崩壊国家」のもとでのイスラーム法廷やイスラームの慈善団体の活動，さらに後にこれを統合していくイスラーム原理主義の問題に関しては，ICG［2005］を参照のこと。本来，イスラーム法廷はモガディシュを中心とした自発的な秩序構築の試みのひとつという側面を有していたと考えられる。しかし，それがイスラーム原理主義勢力と一部関係を有していったため，「対テロ戦争」という国際社会の論理のもとで，外から力によってその試みが壊されているというのが，2006年末から2007年初にかけてのソマリアにおける動向と理解される。

〔参考文献〕

＜日本語文献＞

遠藤貢［2006］「崩壊国家と国際社会――ソマリアと『ソマリランド』――」(川端正久・落合雄彦編『アフリカ国家を再考する』晃洋書房　131-152ページ)。

柴田久史［1993］『ソマリアで何が？』岩波ブックレットNo.302　岩波書店。

――［2000］「なぜ，ソマリアは国家が崩壊したのか」(『NIRA政策研究』第13巻第６号　16-19ページ)。

＜外国語文献。

Adam, Hussein M., and Richard Ford eds.［1997］ *Mending Rips in the Sky: Options for Somali Communities in the 21st Century,* Lawrenceville: Red Sea Press.

Ahmed, Ali Jimale, ed.［1995］*The Invention of Somalia,* Lawrenceville: Red Sea Press.

――［1995］" 'Daybreak Is Near, Won't You Become Sour' Going beyond the Current Rethoric in Somali Studies, " in Ali Jimale Ahmed ed., *The Invention of Somalia,* Lawrenceville: Red Sea Press, pp.135-156.

Ali, Armed Qassim［1995］" The Predicament of the Somali Studies, " in Ali Jimale Ahmed ed., *The Invention of Somalia,* Lawrenceville: Red Sea Press, pp.71-80.

Askar, Ahmed Omer［1993］ *Sharks and Soldiers,* Finland: HAAN Publishing.

Bahcheli, Tozun, Barry Bartmann, and Henry Srebrink eds.［2004］ *De Facto States: The Quest for Sovereignty,* London: Routledge.

Besteman, Catherine［1996a］" Representing Violence and ' Othering ' Somalia, " *Cultural Anthropology,* 11(１), pp.120-133.

—— [1996b] “Violent Politics and the Politics of Violence: The Dissolution of the Somali Nation-State,” *American Ethnologist,* 23(３), pp.579-596.

—— [1999] *Unraveling Somalia: Race, Violence, and the Legacy of Slavery,* Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

Besteman, Catherine, and Lee V. Cassanelli [2003] *The Struggle for Land in Southern Somalia: The War behind the War,* London: HAAN Publishing.

Brons, Mari H. [2003] *Society, Security, Sovereignty and the State in Somalia: From Statelessness to Statelessness?* Utrecht: International Book.

Cassanelli, Lee V. [2003] “Explaining the Somali Crisis,” in Catherine Besteman and Lee V. Cassanelli eds., *The Struggle for Land in Southern Somalia,* London: HAAN Publishing, pp.13-26.

Clarke, Walter S., and Jeffrey Herbst [1997] *Learning from Somalia: The Lessons of Armed Humanitarian Intervention,* Boulder: Westview.

De Waal, Alex, ed. [2004] *Islamism and Its Enemies in the Horn of Africa,* Addis Ababa: Shama Books.

Doornbos, Martin, and John Markakis [1994] “Society and State in Crisis: What Went Wrong in Somalia,” in M.A. Mohamed Salih and Lennart Wohlgemuth eds., *Crisis Management and the Politics of Reconciliation in Somalia,* Uppsala: Nordiska Afrikainstitutet, pp.12-18.

Drysdale, John [1994] *Whatever Happened to Somalia?* London: HAAN Publishing.

Dualeh, Hussein Ali [1994] *From Barre to Aideed: Somalia: Agony of Nation,* Nairobi: Stellagraphics.

Duyvesteyn, Isabelle [2005] *Clausewitz and African War: Politics and Strategy in Liberia and Somalia,* London: Routledge.

Farah, Ahmed Yusuf [1994] *The Milk of the Boswellia Forests: Frankincense Production among the Pastoral Somali,* EPOS, Research Program on Environmental Policy and Society, Department of Social and Economic Geography, Uppsala University.

Geshekter, Charles [1997] “The Death of Somalia in Historical Perspective,” in Hussein M.Adam and Richard Ford eds., *Mending Rips in the Sky: Options for Somali Communities in the 21st Century,* Lawrenceville: Red Sea Press, pp.65-98.

Hashim, Alice Bettis [1997] *The Fallen State: Dissonance, Dictatorship and Death in Somalia,* Lanham, Md.: University Press of America.

Hussein, Shamis [1997] “Somalia, a Destroyed Country and a Defeated Nation,” in Hussein M. Adam and Richard Ford eds., *Mending Rips in the Sky: Options for Somail Communities in the 21st Century,* Lawrenceville: Red Sea Press,

pp165-192.

ICG（International Crisis Group）［2005］ *Somalia's Islamists,* Africa Report No. 100, Brussels: ICG.

Jackson, R. H., and Carl G. Rosberg ［1982］ *Personal Rule in Black Africa: Prince, Autocrat, Prophet, Tyrant,* Berkeley: University of California Press.

Kingston, Paul, and Ian Spears eds. ［2004］ *States within States: Incipient Political Entities in the Post-Cold War Era,* London: Palgrave Macmillan.

Laitin, David ［1976］ " The Political Economy of Military Rule in Somalia, " *Journal of Modern African Studies,* 14（3）, pp.449-468.

—— ［1979］ " The War in the Ogaden: Implications for Siyaad's Role in Somali History, " *Journal of Modern African Studies,* 17（1）, pp.95-115.

Laitin, David, and Said S. Samatar ［1987］ *Somalia: Nation in Search of a State,* Boulder: Westview.

Lewis, I.M. ［1961］ *A Pastoral Democracy: A Study of Pastoralism and Politics among the Northern Somali of the Horn of Africa,* Oxford: Oxford University Press.

—— ［2002］ *A Modern History of the Somali,* London: James Currey.

Little, Peter D. ［2003］ *Somalia: Economy without State,* Bloomington: Indiana University Press.

Lyons, Terrence, and Ahmed I. Samatar ［1995］ *Somalia: State Collapse, Multilateral Intervention, and Strategies for Political Reconstruction,* Washington, D.C.: Brookings Institution.

Marchal, Roland ［1997］ " Forms of Violence and Ways to Control It: The Mooryaan in Mogadishu, " in Hussein M.Adam and Richard Ford eds., *Mending Rips in the Sky: Options for Somali Communities in the 21st Century,* Lawrenceville: Red Sea Press, pp.193-208.

—— ［2004］ " Islamic Political Dynamics in the Somali Civil War, " in Alex De Waal ed., *Islamism and Its Enemies in the Horn of Africa,* Addis Ababa: Shama Books, pp.114-145.

Mazrui, Ali A. ［1997］ " Crisis in Somalia: From Tyranny to Anarchy, " in Hussein M.Adam and Richard Ford eds., *Mending Rips in the Sky: Options for Somali Communities in the 21st Century,* Lawrenceville: Red Sea Press, pp.5-11.

Menkhaus, Ken ［2004］ *Somalia: State Collapse and the Threat of Terrorism,* Adelphi Paper 364, London: International Institute for Strategic Studies.

Rotberg, R. I., ed. ［2003］ *State Failure and State Weakness in a Time of Terror,* Washington, D.C.: Brookings Institution Press.

—— ed. ［2004］ *When States Fail: Causes and Consequences,* Princeton: Princeton University Press.

Salih, M.A. Mohamed, and Lennart Wohlgemuth eds. [1994] *Crisis Management and the Politics of Reconciliation in Somalia,* Uppsala: Nordiska Afrikainstitutet.

Samatar, Abdi Ismail [1989] *The State and Rural Transformation in Northern Somalia, 1884-1986,* Madison: University of Wisconsin Press.

—— [1994] " Empty Bowl: Agrarian Political Economy in Transition and the Crises of Accumulation, " in Ahmed Samater ed., *The Somali Challenge: From Catastrophe to Renewal?* Boulder: Lynne Rienner, pp.65-92.

Samatar, Ahmed I. [1988] *Socialist Somalia: Rhetoric and Reality,* London: Zed.

—— [1994]" The Curse of Allah: Civic Disembowlment and the Collapse of the State in Somalia, "in Ahmed Samater ed., *The Somali Challenge: From Catastrophe to Renewal?* Boulder: Lynne Rienner, pp.95-146.

—— ed. [1994] *The Somali Challenge: From Catastrophe to Renewal?* Boulder: Lynne Rienner.

Tadesse, Medhane [2002] *Al-Ittihad: Political Islam and Black Economy in Somalia,* Addis Ababa: Meag Printing Enterprise.

Tripodi, Paolo [1999] *The Colonial Legacy in Somalia: Rome and Mogadishu: From Colonial Administration to Operation Restore Hope,* London: Macmillan.

Zartman, I. William, ed. [1995] *Collapsed States: The Disintegration and Restoration of Legitimate Authority,* Boulder: Lynne Rienner.